

第20回 日文研フォーラム



往生—日本の来生観と尊厳死の倫理

“Ojō” : Japanese Views of the Afterlife and the Ethics of Death with Dignity



カール・ベッカー

Carl Becker

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原猛

● テーマ ●

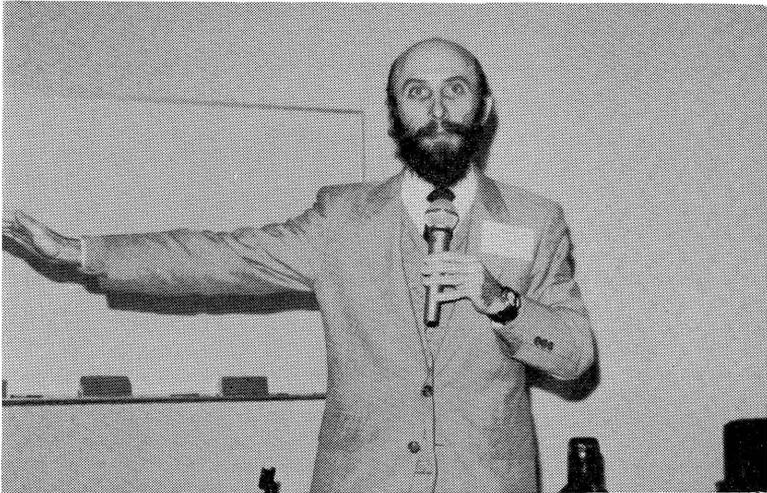
往生－日本の来生観と尊厳死の倫理

"Ojo": Japanese Views of the Afterlife and the Ethics
of Death with Dignity

● 発表者 ●

カール・ベッカー

Carl Becker



発表者紹介

カール ベッカー
Carl Becker

筑波大学外国人教師

- 1951年 米国イリノイ州シカゴ市生まれ
1971年 イリノイ州のプリンシピア大学卒業(宗教哲学)
1973年 ハワイ大学イースト・ウエスト・センター修士号
1976年 天理大学日本語コース卒業
1979年 京都大学大学院宗教学科国費留学研究終了
1981年 ハワイ大学イースト・ウエスト・センター博士号
1981-3年 南イリノイ州立大学助教授(東洋哲学・倫理学)
1983-5年 大阪大学フルブライト客員教授(米文学・思想)
1985-6年 天理大学助教授(米文学・宗教)
1986-8年 ハワイ大学助教授(教科課程研究・倫理学)
1988年 筑波大学外国人教師(宗教哲学・英米思想)現在に至る

主な出版物

- 1980年 漢字早見帳(開拓社)
1983年 日本-我が師、我が恋人(英宝社)
1985年 キリスト教-歴史と思想(英宝社)
1988年 コミュニケーション入門(英宝社)
1990年 6月 死と宗教的体験の研究「宗教学研究」
その他、書評、学術記事、多数

はじめに

私みたいなのが、日本人に対して、日本の死生観を語ることは誠に恐縮なことである。本来ならば、私が皆様の経験や御自分の来世観について聞かせて頂きたいのであるが、私は来世観を研究してきたし、聞いて下さる方も大勢いらっしゃるので、ただたどしい日本語と不十分な研究でも、あえて発表させて頂く次第である。

今日の題は『往生』ということだが、『往生』には二つの色合が絡んでいると思われる。つまり、一つは浄土であろうと天国であろうと、あの世という所に行くこと、それこそ来世観において「あの世とは何なのか」という疑問にも及ぶ。同時にもう一つ、やや動詞的な意味も含まれていると思われる。「往生する」という時には、むしろ「死ぬ」という動詞を考えるのである。従って、その二つの方面について触れさせて頂きたいと思う。

『往生』という文字が宗教体系の中で初めて出てくるのは、中国の五世紀あたりであるが、その時代に『観無量寿経』というお経が出来上がる。『観無量寿経』のサンスクリット版はないというので、恐らく中国で出来上がったのではないかと考えられている。ところが同時に、『阿弥陀経』とか『大無量寿経』というよ

く似た内容を持っているお経が、インドの方から伝わって来るのである。ここでは特に、『観無量寿経』の中の「往生体験」を少し考えてみたいと思う。

『観無量寿経』の往生体験

まず、「死ぬ時に自分の意識が体より離れる」とされている。あの世に生まれる時は、蓮の蕾が開き、その蓮の蕾に坐って生まれるという。そしてこの世とあの世を繋ぐのは、黒いトンネルのような茎なのである。従って自分の死んだ体を離れる時には、この茎の黒いトンネルを通して行くわけである。つまり最初に（一）体より離脱し、次に（二）黒いトンネルに入るのである。

続いて（三）花園の中で生まれるとされているが、周りはキラキラする池や音楽を聞かせてくれる森林、彩られた木々に囲まれている。その自然の様子はこの世の自然とは次元が違い、遙かに輝き、遙かに美しい自然だと言われる。そして（四）阿弥陀に出会うというが、この阿弥陀というのは、御存知のように、サンスクリット語のアミターバとアミターユスという二つの言葉から来るもので、アミターバというのは無限の光、アミターユスというのは無限の命、すなわち無量寿である。日本語ではこれら二つの言葉の「アミタ」だけを取って、阿弥陀（ア

ミダ」と呼ぶが、これは人間でも人格神でもなく、むしろ無限なる光と命のようなものなのである。しかし、それは人間の目には大きな神様のような、光で輝くような存在に見え、そこから慈悲なる心や愛に包まれる感じを人間は抱くと記されている。

無論あの世のことだから、そこにいるものは死者、既に亡くなった人ばかりで、(五)あの世では、自分より先立った先祖などにも出会えるとされる。更に(六)自分の人生を反省する要因がその過程に含まれるという。

中国における往生思想の始まり

「往生思想」を追って行くと、まずどうしてそれが中国で流行ったかという問題に行き当たると。

そこで登場するのがダンルアン、日本語でドンラン(曇鸞)という学者である。彼は中国の西安の近辺に住み、六十歳(当時の寿命)を過ぎた時に病気にかかり、一時死にかけた。その病中、どうもあの世の夢を見たようなのである。『大正大藏経』によれば、夢の中で金色の門が開かれ、そこに輝く世界を一瞬見たという。そして病気が突然治り、治った曇鸞は急に巡礼を始める。西安というのは御存知

の通り中国の北部にあるが、そこからずっと南の龍山という所まで、千何百キロも歩いて行ったのである。どうして曇鸞が龍山まで行ったかと考えると、龍山は道教の学問の中心であり、いわゆる瞑想法を含めて、永久に生きる方法、すなわち延命術などが教えられていた所だったからであろう。そこで幾つか道教の秘密経を授かって、また西安に戻ろうとしたのである。

考えてみると、六十歳を過ぎた老爺が中国の厳しい砂漠を横切り、川を渡って一人旅をするということは途轍もないことである。途中で盗賊にも会いかねないし、どういう目に会うかも分からないのである。しかし、彼はどうしても龍山に行きたいという念にかられ、そこでまた長い間念願して、やっとのことでお経を授けられたのである。そしてそれを自分で担いで西安に持って帰ろうとするのであるが、その途中で有名なボディルチ（菩提留支）という名前のインドの坊さんに出会った。その時どういふ会話が交わされたのかははっきりとは分からないが、『大正大蔵経』によれば、菩提留支に会って、曇鸞は折角苦勞して頂いた道教のお経を捨て、仏教のお経を二つ三つ手にして、西安に戻ったというのである。そのお経とは何かというと、御存知の『阿弥陀経』、『大無量寿経』、『観無量寿経』といったお経であった。

そこから推測してみると、こういった対話があったのではなからうか。「巡礼者のようですね。どちらの方に行かれたのですか。」「いや、実は私は西安の者ですが、遠い南の龍山に巡礼に行っていました。」「おじいさんはこれだけ歳を召されて、どうしてそんな巡礼をなさったんですか。」「それに対して、曇鸞は自分の夢、自分のあの世の様子を語られたことと思う。あの世の話になったので、菩提留支はインドから持ってきたお経の中に、あの世についてのお経が幾つかあるのを思い出し、曇鸞に示したに違いない。「あの世の話でしたら、このお経をご覧になったらどうか」と勧められて読んでみると、そこには道教のものよりも更に曇鸞の体験にぴったり合った話が記されていたと思われる。

と言うのも、曇鸞大師が西安近辺に戻られた後、それまで北中国では知られていなかった阿弥陀の立像（当時は石で彫ったものがほとんどであった）が、急速に増えたのである。そして彼の弟子や孫弟子、道綽や善導などもそういう伝統を受け継ぐのである。善導は曇鸞とは違って、別に死に至る病気に侵されてあの世を体験したのではなかった。『観無量寿経』によれば、瞑想によった何度もあの世に行って来たという経験が記録されているので、瞑想の名人であった善導はその方法によってあの世を体験したのである。

日本における往生思想の受容

この話からわかることは、あの世（つまり往生）を経験したければ、二通りの方法があるということである。一つは死ぬこと、または死にごく近いところまで行ってこの世に戻ることである。そしてもう一つは瞑想中に、あの世を体験することである。御存知のように、比叡山から慈覚という僧侶が中国に行き、その阿弥陀思想を持って帰り、天台宗の中に導入した。比叡山の様々な行の中には、あの世（浄土）を瞑想の対象にする行があった。空也、一遍、法然、親鸞といった数々の日本の名僧もそこから出発したのである。確かに天台の中には瞑想法が保存されていたが、天台仏教はあまり一般向きではなく、一般の日本人はうまく瞑想が組めなかったようである。動物蛋白質を食べたり、お酒を飲んだり、ましてや性関係を持ったりすると、インドにおけるような瞑想はうまく出来ないことは、やってみればすぐわかることである。従って、そういう瞑想法は日本では流行せず、むしろ死ぬ時の往生が注目されるようになる。

平安、鎌倉時代に遡って見ると、日本ではお坊さんは臨床カウンセラーのように、臨終の時に家族を慰めたり、本人を導いたりする教育者でもあった。その役

割は室町から徳川にかけて変わってしまったが、例えばお坊さんの手引きであった源信の『往生要集』を読むと、人の死に場所に行く時、「何が見えるかと聞け」とある。もし、死にかける本人が何か見えると言うならば、それを細かく記録せよ、と書かれている。従って、源信の平安時代後期頃から、死ぬ人の最後の言葉を大変重視するようになっていた。例えば源空（法然上人）の恩師である皇円上人は、御存知の『扶桑略記』という本を編集したが、その中でそういった話をたくさん記録している。日本では坊主の死に方だけでなく、一般市民の死に方も詳しく記録されている。

そして面白いことには、その死に方の中でよく出てくる例が、先述した『観無量寿経』のそれと非常によく似ているのである。体を離れ、黒いトンネルを通り、キラキラする花園に出て、そこで阿弥陀のような（場合によっては、観音様だの、閻魔大王だの、地藏様だの、当時の日本人にとって親しみやすかった名前が出てくる）、少なくとも偉大なる神様のようなものに出会い、そこで何らかの形で反省させられ、この世に戻されたという話が数々記録されているのである。こうした話は『扶桑略記』だけでなく、『元亨釈書』、『宇治拾遺物語』、『往生伝』、『往生極楽記』などといった古典文学の中にもかなりあるのである。台湾あたり

に行く、今でもそういう往生伝みたいなものが作られ続けていて、その伝統が受け継がれている。日本では徳川時代から臨終の記録はあまり集められなくなつたようであるが、この裏には、お寺やお坊さんの役割が著しく変わってしまったという要因が潜んでいる。

現代の我々は、『扶桑略記』だの『往生極楽記』といった古典を読むと、昔の人は何と迷信深かつたのだろうと思いがちであるが、場合によっては、きちんとした場所、名前、目撃者、日付、細かい周りの話まで記録されていることがある。そこまで細かい記事が書かれているならば、信頼できる話ではないかと考えられるほどであるが、ここでは彼らが本当にあの世を見たのかどうかは別問題として、今日の話の題目を来世観としたのは、来る世があるかどうかという断言をしたくないからであるが、少なくとも死にかけて本人たちには、幻想というにしろ、ヴィジョンと呼ぶにしろ、何らかの生きがいのようなものが見えたようなのである。

現代の臨死体験報告

今から十五年ほど前、アメリカの病院の中でもこうした話が数多くあるという

ことを、エリザベス・キューブラーロスとレイモンド・ムーディ・ジュニアという人が全く別々に研究して同時に出版した。二人が会った時にはお互いに驚き、面白い対話があったらしいが、キューブラーロスという人はスイス生まれの医者で、昔の日本のお坊さんみたいに、長年臨床カウンセリングをしていた方である。そして数多くの瀕死の患者と対している時には、医者として自分の役割は本人の気持ちを支えにすることだけだという信念を持ち、様々な信仰を持っている人たち、もしくは無神論者であるドイツ人やアメリカ人を相手にしているのです、仏教のお坊さんと違って、説法はできない状況にキューブラーロスは置かれていた。そこでキューブラーロスは、どんな相手の話を聞くことにした。そして多くの話を聞いているうちに、何とあの世を見てきたという患者に出会うのである。出会い始めるのは今から四十年ぐらい前の話で、その例をコツコツと二十五年あまり集めた結果、とうとうこれは発表してもいいのではないかと考えたのである。(キューブラーロスの本は読売出版から五冊ほど和訳されており、『死ぬ瞬間』川口正吉訳等有る)

当時大学院にいた私は、『極楽記』とか『扶桑略記』とかいったものを研究していたが、そこに出てくる話とエリザベス・キューブラーロスの報告とにあまり

にも類似点が多いので、ひょっとしてこの平安・鎌倉・室町の話は単なる幻想や神話ではなく、実際に今でも人間に出来る体験ではないかと考え付いたのである。そこでアメリカで研究されている臨死体験の内容と分析について、少し考えてみたいと思う。

まず、誰がこういった臨死体験をするのかということを考えてみよう。つまり、死ぬ前にこのようなヴィジョンを見るには、どういう資格や原因があるのかということである。最初に考えられることは、本人の教育に因るのではないかということである。つまり、本人が死んだら往生するんだと若い時からずっと教えられていたら、当然自分の渴望や期待に因って、死ぬ瞬間にそういう幻想を自分の頭で作れるのではないか、ということである。ところが、アメリカで集められた何千という例をみた結果、不思議なくらいにそうした関連性はないのである。また、これは驚くべきことだが、共産主義者、無神論者といった教会には縁のない者でも、しばしばこうした体験をするのである。逆に、毎週毎週たいへん熱心に教会に足を運んだおばあさんでも、誰よりも神様が見たいと願っているが、なかなかそうはいかない人もいるのである。すなわち、こうしたヴィジョンを見るのは、少なくとも子供の頃からの教育や自分の渴望、期待には因らないという

である。

次に、入院中だからいろいろな薬も飲んでいるだろうし、麻酔薬などもかけられるわけだから、臨死体験は薬の作る幻覚や高熱が作る現象ではないか、とも考えられよう。そこで、病院の協力を得て本人のカルテと突き合わせることに、どういふ薬を何時飲んだかということや、脈拍や脳波やいろいろな身体的要因を加えて、患者の体験の時期を比較してみたのである。すると不思議なことに、逆比率が表れる。つまり、薬をたくさん飲めば飲むほど、また麻酔薬を強くかけたりするほど往生経験はしなくなり、あるいは高熱を出したりすればするほど、また精神異常になった場合には、逆に往生体験を発言しなくなるのである。すなわち、何の薬も飲んでなく、体温も普通で全く正常な者こそ、こういう体験を後で発言するのである。勿論、薬、麻酔薬、高熱などといった原因も考えられなくはないが、分析の結果からは、それだけでは片付けられないのである。

往生体験と夢・幻覚の違い

では、体を離れ黒いトンネルを通過して花園に生まれるという「体験」が確かに本人にとってはあるとしても、その「体験」は一体何なのか。それは単なる夢の

ようなものではないのか、あるいは一種の幻想・幻覚ではないのかと疑うことが出来る。そこでまず、普通の夢や幻覚と比較してみよう。

人間は皆、毎晩実は夢を見る。自分は覚えていないという人があれば、それは夢の日記をとる習慣がないからであって、夢の日記をとるようになれば、少しは自分の夢の内容を覚えられるようになる。法然も親鸞も高弁も、昔の坊さんはみな夢の日記をとっていたのだが、我々も毎晩毎晩夢を見ているのである。

夢のことを思い出して頂ければ、まず大した筋のないことが知られよう。たとえ筋があったとしても、突然背景が変わったり、自分がここにいたと思っただけ突然あそこいたり、接しているつもりのあるものが突然別のものに化けたりし、要するに夢には一貫性がないのである。ましてや、自分の夢と他人の夢を比べて見ても、一致する夢などほとんどないものである。だから、フロイドやユングのような精神科医は個性を知るために夢を分析することにしたのである。夢はごく個人的なものであり、自分の心の色々な目的や意図の反映はあっても、他者の意図や趣旨を感じることは滅多にない。一般化すれば、夢の中では相手の気持ちを感ずることは滅多にない、と夢の研究者は言っている。

ところが、往生体験には夢にない一貫性がある。多くの人間が同じような体験

を後で発言する。トンネル体験、花園体験、神様や阿弥陀様みたいなものに出会う体験、自分の人生を反省させられる体験。多くの人が言うには、神のような存在の前に立つと、言葉を使わなくても自分の胸の裡、自分の心がそのまま読み取られてしまうと言うのである。そして、その阿弥陀様みたいな存在に対しては、嘘をつこうにもつけないと言う。別に日本語とか英語といった言葉を使っているわけでもないのに、きちんとこちらの思い描くことを感じ取られ、阿弥陀様の慈悲や愛を全身で感じながら、花園たる浄土を案内され、自分はこれからどう歩むべきか、どう反省すべきか、ということ聞かされると言うのである。それも耳で、つまり言葉で聞かされるのではなくて、心から心へ、以心伝心のようなもので伝わると言う。このように比較してみると、一貫性、目的意識、そして相手とのテレパシーのようなコミュニケーションという点で、普通の夢とは根本的に違う体験と言えよう。

さらに次のような点も興味深い比較である。夢の中には目が覚めた時に不思議な心持ちになるものもあるが、夢によって自分の人生を変えようとすることは滅多にないであろう。人生に一、二度あれば多い方で、大抵の人間は「あれは夢だった」と済まし、普通通りに生き続けるものである。ところが、往生体験をした

患者たちはこの世に戻ると、不思議なほど、曇鸞のように自分の生き方を変えるのである。オハイオ大学のフリン教授が特にこういう例を集めて分析したのだが、無神論者や大した信者でもなかったアメリカ人が往生体験をしたため、体が治った後、急に修道院に入ったり、神父や牧師の勉強をし出したりすることがよくあるのである。御存知のように日本の大学とは違って、アメリカでは何歳になっても大学に入学ができ、好きな勉強ができる制度が確立しているので、たとえ五十歳、六十歳でも、神父になる道が用意されている。また正式に宗教の道に向かわなくても、それまで名誉や富、あるいは世間の評価を得るために努めていた者が、往生体験を経た後、ボランティア活動、例えば恵まれない子供や孤児のために励み出したり、目の見えない人たちのためにブレイル点字を勉強し出したりするといったように、往生体験者の多くが困った人を助ける活動に励むようになる。こうしたことから、往生体験というものは、夢と見做すには余りにも大きなインパクトを持つ体験と言わなければならぬ。

往生体験にはもう一つ普通の夢には見られない現象が潜んでいる。それは、超自然的現象によって超常的知識を得るということである。例を二つ、三つ申し述べよう。

ある時、セント・ルイスという街でかなりの金持ちが亡くなったが、遺言が残されていなかったために、子孫が財産に関して争い出したことがあった。その時、彼の孫が大変な病氣にかかり、入院したがもうお手挙げの状態で医者も諦めたのであったが、皆の祈りのお陰か、奇跡的に蘇った。蘇って来た後、あの世でおいさんに会って来た時、その孫は言うのである。そしておじいさんは、「お前らは聖書を読まないから分かつたらんが、遺言はちゃんと書いて、聖書の中に挟んでおいた」と言ったそうである。それで、親たちが滅多に読まない聖書を引き出して、指摘された箇所を開けて見ると、きれいな薄い紙におじいさんの字で遺言が書いてあった。遺言がそこにあるということを知っていたのはおじいさんだけであり、それまで誰も知らなかった。知っていれば、争いも裁判も避けられたに違いない。そこで謎となるのは、一時的に死んだかと思われた孫がその情報をどうやって得たかということである。普段、その孫には超心理的な体験もなければ、決して靈感っぽい女性でもなく、ごく普通の高校生だったそうである。

次にこういう例がある。アメリカのロスで、オートバイに乗った二十歳前後の青年がダンプにぶつかり、意識不明の瀕死の状態になったが、すぐに救急車で運ばれて、色々な医療措置を施されたお陰で、彼も奇蹟的に助かって蘇ってきた。

そして意識を取り戻した後、あの世でおばあちゃんやおじいちゃんに会い、そしてニューヨークに住んでいる従兄弟のティムにも会ってきたと言ったのである。病院のベッドを囲んでいた親たちは、「確かにおじいちゃんもおばあちゃんも何年前前に亡くなったが、ティム君は今ニューヨークで勤めているはずだし、第一まだ二十数歳のはずだが」と不思議がっていると、数時間後、ニューヨークからティムが先に亡くなったという知らせが入った。その時まで、ロスでそういう事実を知っていた者は一人もおらず、青年の話を聞いた者も、ティムは元気でやっているだろうと推測するにとどまっていた。ティムの訃報を誰よりも早く知ったのは、この往生体験者だけであった。なお、この青年も、普段から全然宗教的なことなど信じていなかったし、靈感っぽい人でもなかった。普通の夢や幻覚の中では、こうした情報を得ることはないであろう。

また、フランスのある有名な歌手が一時的に亡くなった時に、「お前の死ぬ時期はまだ来ていない」、つまりこの世でまだ仕事をしなければならぬと言われ、おまけに、「この女性に出会え。そしてその女性と結婚して、福祉の道を歩まねばならない」と命じられたと言うのである。ところが本人は普段からたくさんの女性に囲まれてばかりいたので、一人の女性など探したこともなかったし、まし

てや自分の得意なことは歌うことだと思っていたので、社会福祉のような道を歩むなどということは、それまで考えたこともなかった。意識が戻っても、「あれは嘘ではなかったのか」という疑いが晴れなかったが、何ヵ月も経たないうちに、なんと教え示された女性とびつたりの人が現れたのである。要するに、このような予知的な、予言的な知識を得るといふことも、単なる夢や幻覚と大いに異なることである。

こういう研究がどうしてアメリカで熱心に研究されているのかとよく聞かれるが、その裏には、二十年ぐらい前に非常に流行っていた麻薬の問題がある。今でこそ厳しく取り締まられ、アメリカは麻薬に対して戦っているが、その当時は別に違反でもなんでもなく、ハーバードの教授でさえ、麻薬をよく使ったり勧めたりしていた。その頃の麻薬体験がこの研究の端緒を作ったと言ってもいいのであるが、もう一つのきっかけは、当時のベトナム戦争でかなりの若者たちが戦場で撃たれ、死に近づく者がたくさん出たということも挙げられる。それまでの戦争であったら放っておかれたような重傷人でも、医学が著しく発展したおかげで、戦場からヘリコプターで近くの病院に運ばれたりして、蘇生を経験する者が急に増えたのである。そして、彼らの中からしばしば右のような話が聞かれるように

なり、それが研究を促すきっかけになったと考えられる。

幸いに戦後の日本では麻薬の問題も戦争の経験もないが、防衛大学の教授が第二次世界大戦の戦場で集めた話の中に、多少類似した話を見つけていることが出来る。

往生体験の意味と応用

先述したように、往生には死——ある意味ではこの世の終わり、ある意味ではあの世の入口——という意味と同時に、死ぬ時の行為——自分の胸の裡の動きも相手の胸の裡の動きも含む——動詞的な意味があると私は思う。そして我々にとって大切なことは、この往生体験をどう理解し、そしてどう応用すればよいかということである。最後に、その応用の面をいくつか考えたいと思う。

まず最初に理解しておくべきことは、自分の体を離れながら、この世と共にあの世をも体験している患者が大勢いるということである。現在、脳死を判定するには、二十四時間連続で脳波を計らなければならないことになっており、一時的に脳波が止まっても、脳死とは判定しないのであるが、その脳波のない状態で往生体験をする者がいる。あるいは、脳波がごく遅い、何の反応もなく死に近い状態を示している時にも、視覚、聴覚、場合によっては嗅覚や味覚の体験さえして

いたと、後で蘇生した本人が言うことがある。こういうことは、仏教においては別に何の驚くべきことでもないのであるが、今の一般常識から見れば、頭脳と切り離された体験などあり得ないであろう。しかし往生体験の研究から導き出されるところによると、頭脳が働いていなくても、別の意味の意識、それは仏教で言うならば「阿頼耶識」ということになるうし、俗っぽく言えば靈魂ということになるうが、それを何と呼ぶにせよ、何か存続するものがあると考えざるを得ないのである。その存続は、果たして永久的なものなのか、それとも一時的なものなのかといったことは全く分からないが、少なくとも次のようなもの見方が出来るようになるのではなからうか。すなわち、人間は単なる機械のような物ではなく、体を離れても何らかの意味で生き残り得る存在であるということである。

こうしたものの見方は、一つには歴史的な古典を読む視点を變えるであろう。例えば仏教のお経や『扶桑略記』などを読み直す時でも、そこに記されている話がただ単なる作り話や神話ではないと見做すようになるであろう。当時の人間は我々ほど物質的には恵まれていなかった代わりに、あの世を見る眼を持っていたかも知れないのである。

次に考えられる応用は、突拍子もないことと思われるかも知れないが、自殺防

止ということである。私の勤めている筑波大学は創立十五年目になるが、当初は色々な心理的な原因で自殺がきわめて多かった。幸い今では国立大学での平均より下になったが、そのようになったのも、裏で自殺防止に励んでいる教師が多いからである。実際の自殺防止教育の場面においては、この往生体験の話はたいへん役立つものなのである。それには二つの理由がある。

一つには、人はこの世や人間が嫌になり、自分の存在自体も嫌になって、それから逃げたい、無になりたい、という気持ちから自殺を図る。ところがシェイクスピアのハムレットも言うように、もしもこの世が最後でなく、別の形でこの人生が続くのであれば、必ずしも来世がこの世よりも好ましいという保証は何も無いであろう。そう考えるだけでも、今の苦しさに変わりはないのに、自殺を取止める青年が中にはいるのである。

自殺に失敗した自殺未遂の人を特に研究しているコネティカット大学のブルース・グレイソンという親友がいる。ブルースの話によると、自殺未遂者に限って、先述した往生体験が異なっている。往生体験が無いと言うよりも、黒いトンネルまでは行くが、それが永久に続くかのようにトンネルの中に閉じ込められてしまおうと言うのである。アメリカの自殺未遂者によると、暗い宇宙の中にぶら下がっ

ていて、前に行こうと思えば前に行けるし、上下左右に動こうと思えば動けるが、そこには何も無いと言う。何か気味の悪い物があるような感じもするけれども、それと連絡することができない。そして、大体自殺する人は寂しがり屋の人が多いようであるが、この世で感じた最悪の寂しさと比べても、比較にならないほどの寂しさを感じたと言う。こういう話をたくさん集めて自殺を考えている学生などに読ませると、かなりの者が考え直してくれるのである。

三つ目に考えられることは、往生体験はもともとキューブラー・ロスが臨床の過程で注目するようになったことから判るように、臨床カウンセリングにかなり役立つということである。普通の人間であれば、誰でも心の底に死への恐怖を持っているであろう。死にたくないという気持ちは、動物的本能としても強くあるはずである。従って、不治の病気にかかって後は痛みを耐えるだけの存在となつた末期患者は、その肉体的痛み以上に、死への恐怖を非常に強く感じるようになる。痛みはどうか耐えられるけれども、自分が死んでこの世からいなくなってしまうという思いには、とても耐え難いのである。しかし、往生体験をした人の話を末期患者に優しく話すと、多くの場合、ほっとした表情になり、精神的にたいへん安らぐと言う。御存知のように、患者が安らかだと薬もよく効くようになる

る。医者も看護婦も楽になる。そして本人が治っていく場合もあれば、たとえ亡くなっても、より安樂的に平安に亡くなれるわけである。だからこういう意味においても、往生体験はより広く応用できると思うのである。もともと仏教のお坊さんも、正にそういう意味でのカウンセリングをしていたのである。

西洋医学とカウンセリング

西洋の病院には、体だけを扱う医者と共に、精神科の医者や宗教家もいる。人間の肉体と精神の二元論は、プラトンが始祖かも知れないが、デカルト以降ははっきりと分けられて定着した。デカルトが言うには、動物は勿論そうだが、我々の肉体はあくまでも機械であって、精神は全く別な靈魂みたいなものである。従って、西洋の病院には神父や牧師が自由に出入りし、死に至る患者のカウンセリングをする。無神論者だと言えば、精神科の医者と相談できる。最近、日本の新聞でもガンの告知の問題を取り上げ、果たしてガンの患者にガンだと知らせるべきかどうか、という議論が激しくされている。私から見れば、問題の核心はそういう議論には無い。日本の医者は一人の患者に一日平均二分しか会っていないと言われているが、その短い間に、「あなたは難しいところにあるんです」と言

うのと、「あなたはガンです」と言うのとは、大した変わりはないように思う。この問題の核心は、患者の心を安らげるために、いかに優しく納得がいくように話をするか、いかに患者が頑張りたくなくなるような心を育てるか、ということであるが、日本の医者はそのような教育を受けて来ていないので、急に「そうしろ」と言われても無理であろう。

西洋の病院でも医者は大変忙しいので、各患者に対して三十分も時間をかけるわけにはいかない。そこで、牧師、あるいは精神科の医者に対して、「この患者はガンなんだけれども、彼の精神に合わせた言い方で伝えてほしい」と頼めるのである。頼まれた牧師や精神科医は、ゆっくり患者の話や悩み事を聞いて患者の精神をよく知った上で、ガンへの心準備ができた頃を見計らい、一人の友人として、優しい言葉で「実はそうなんです。考えておられる通りガンなのですが」、と言えるようになる。これだけの準備があればこそ、ガンの告知をしても患者のショックをかなり和らげることが出来るのである。

明治維新以降、日本は全面的に西洋医学を取り入れることにしたが、西洋医学の物質的側面にのみ関心を向けた。そこで病院には、神父や牧師は勿論、精神科医さえ入れなかった。私は決して日本にキリスト教の要素を入れればよかったな

どと言っているのではない、ただ患者の精神的な面をもう少し考える必要があったのではないかと思うのである。日本の歴史上、そうしたことが一度もなかったというのであれば、徳川時代の医者は、物質的なことのみならず、正に精神を相手にする、いわば老賢者のような存在であった。当時の医学はある意味で乏しかっただけに、深く一人一人の患者と接して患者の心身をよく探りながら、薬の調合や治療を進めたのである。時代劇を見ると、時々そういう医者が出てくるが、大阪大学の前身であった適塾などにも、そういう精神のあったことが伺える。だから私は、西洋の病院を真似しろと言うよりも、むしろ日本にあったもともとの精神をもう少し思い出してはどうか、と言いたいのである。

去年、昭和天皇がお亡くなりになった。我々は日夜、陛下の脈拍や呼吸数、輸血の量などを知らされた。そうした扱いがたいへんお気の毒なように見え、ある意味で非人間的なように感じられたのは、私だけであろうか。ところが、今の日本の医学で為し得ることは、そこまでなのである。医学はあくまでも人間を延命させることを使命とし、それ以外のことは育てて来なかった。それ以外のことを医学に頼んでも、無理な願いなのである。

そこで往生体験のもう一つの応用として考えられることは、身体の延命だけに

価値を見るのではなく、別の意味での人間の価値を見出すことである。「量より質」というものの見方は、日本の伝統でもあったはずである。例えば、平家が壇ノ浦で敵に囲まれ、もう敵に切られるしかないと判った時、彼らは自ら切腹したり、あるいは入水する方を選んだのである。また大坂冬の陣では、徳川軍に囲まれた豊臣秀頼やその母たちは、もう逃れようもないと悟ると、自尊心を持って潔く亡くなる道を選んだ。つまり、彼らにとって死が問題になるのは、それがすべての終わりだからではなく、自分の人生という作品の終わり方として重要だということである。その死に方を通して人間の本质が知られるということは、仏教でも昔のインドのお経でも言っている。

今日の医療環境のもとでは、九割以上の人が消毒液の臭う病室で亡くなる運命にある。多くの人は自分のベッドで、あるいは自分の寝慣れた畳の上で、阿弥陀の来迎でも見ながら死にたいと思っただけである。御存知のように、昔の末期患者は縁側のすぐ近くに座ったり寝ころんだりして、西方からの阿弥陀様の来迎を待ち受け、往生してあの世に連れて行ってもらえると信じていた。そういう観念は我々にも多少残っていると思うが、阿弥陀様が消毒された病室に来るかどうかは疑問である。何しろ医者には阿弥陀どころか、靈魂の存在さえ認めてない。お

坊さんが袈裟を掛けて病院に入ろうとしても、縁起が悪いと言われて拒否されるのが落ちである。

こういう状況に対して我々に出来ることは、少なくとも命を時計だけで計ることを止めて、命の質、命の内容、命の意義を考えるようにすることである。日本の尊厳死協会は既にこの方向へ歩もうとしているけれども、まだあまり多くの参加を得ていないようである。

おわりに

最後にもう一つ、往生体験は子供の教育にも応用できると思われる。「えっ、往生体験って死ぬことでしょ。子供に死の話をするんですか」とよく聞かれるが、死を考えることは、要するに生き方を考えることなのである。死が一つの区切りであるならば、たとえそれがお終いであるとしても、それまでに何をするか、何が出来るかということを考える契機となろう。そして、往生体験をした者の話を聞くと、この世にいる間にどれだけ金を稼いだかどうかなどということは、どうでもよく思えて来ると言う。またどれだけ出世したかということも、どうでもよくなる。この間、筑波で半年ほど昏睡状態に落ちた少年がやっとのことで意識を

取り戻し、見事に典型的な臨死体験をしたことがあった。彼の話聞いてみても、それまで親に言われるままに学校の成績を上げることばかりに努めていたが、臨死体験を通して、どうも人生はこの世だけではないと気付き、兄弟に優しくしたり、周りの者を大切にする心が、子供なりに生まれてきている感じがすると言う。

私は日本が大好きだが、その日本が最近、しばしば言われるように、成績や金銭、時間といった、要するに単位で計れるものばかりに束縛されているように思われる。自分の人生は何のためにあるのかということ、もう少し広い視野で考えるならば、もっと豊かで、精神的に誇れる人生を送ってもらえるのではないかと、私は願って止まないのである。

***** 発表を終えて *****

現在日本の学問領域の構造は、その模範とされた19世紀のドイツに遡る事が出来る。しかしながら、次の様な21世紀の問題は、伝統的な領域間の隙間に落ちがちである。例えば、コミュニケーション研究、環境保存研究、地域研究、平和研究、都市計画研究、医学倫理研究、超常現象研究、そして死の研究等である。次の時代を導く程の力は19世紀の学問には無い。

やっとなそこへ新しい風が吹いて来た。日文研では、各領域にまたがり、学問を結ぶ様な展望を見せている。各方面の日本研究者を呼び集め、学閥、年齢、国籍、人種等を越えて、日本を好意的に理解して行く為に、世界で初めて出来た研究組織であろう。そこで開かれる自由な討論、国際会議、日文研フォーラム等の活躍は、大学すら出来ない程のものである。極めて希望的な動きに思われる。

日本人の生き方と死に方を研究する小生にとって、この日文研フォーラムで発表が出来、多数の反応を得られた事は、大変有難い機会であった。日本語を初め、発表内容に就いても問題は有ろうが、御勘弁して頂くよりも、厳しい御教示を頂きたい。今後の研究発展と相互理解の為に尚一層有難く存ずる次第である。

Carl Becker

日 文 研 フォ ー ラ ム 開 催 一 覧

回	年 月 日	発 表 者 ・ テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI ß EN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」
⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」

⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オペリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑭	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」

19	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K.GOODMAN 「忘れられた兵士 －戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
24	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇 －文化伝統からの一考察－」
25	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10.9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. Fatthy 「義経文学とエジプトのベールス王伝説に おける主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研 客員助教授) Karel Fiala 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2. 12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー 東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. Dolin 「ソビエットの日本文学翻訳事情 - 古典から近代まで -」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研 究員) Wybe P. Kuitert 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 - ゲオルグ・マイステルの旅 -」

○は報告書 既刊

非売品

発行日 1991年3月29日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区御陵大枝山町3-2

電話 (075) 335-2222

問合先 国際日本文化研究センター

管理部・研究協力課

©1991 国際日本文化研究センター

■ 日時

1990年2月13日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

